伊方原発運転差止訴訟・第6次提訴の原告に加わりました！

3.11当時、横浜に住んでいた。

震災後、福島県郡山市から転勤で横浜に戻ってきた女性に聞いた話が、忘れられない。子どもが道端の花を摘むとき、やめてと言いたいけど、母親同士微妙なけん制が働いて、言いづらい。苦しかった、と。いずれ郡山を離れられる彼女と、地元の人では、あきらめ度が違うのだと思う。

福島第二原発から遠く250km離れた横浜にも、たくさんの放射能が降りそそいだ。母乳、園庭、給食、プール、布団を干すのか？ イベントどうする？ 様々な論争が起きた。誰のせいでこんなことになっているのかは置き去りにされた感のなか、もやもやする日々だった。

原発政策を推進してきた政府、責任をとることなく営業し続ける東京電力、闇のような原子カムラ。それを許してきたのは、私たちなのだが。チェルノブイリを経験したというのに。

その後私は、伊方原発からわずか55kmの松山に、家族を連れてUターンした。再稼働はないと、漠然と信じていた。福島第二原発から郡山は、60km。

もし伊方で事故が起きたら、間違いなく松山は、大惨事の渦中になる。世界中の私たちのために、すべての原発を、止めなければならない、今度こそ。

西井 紀代子（伊方原発運転差止訴訟第６次原告）

information

１１月２０日は、愛媛県知事選挙の投票日です。
投票に行きましょう！ あなたの１票が政治を変えます！

学習会　山鳥坂ダムの地質学的問題点
日時：１１月２３日（水）１３：３０～１５：３０
会場：松山市民会館第４会議室
講師：小松正幸さん（元愛媛大学学長、地質学）

講演会「憲法９条と私たちの安全を考える」
日時：１１月２７日（日）１３：３０～１６：３０
会場：愛媛県教育会館２Ｆホール
講師：井上正信弁護士（広島弁護士会）
主催：安保法制の廃止を求める愛媛の会･えひめ９条の会（TEL089-913-0448）

伊方原発運転差止訴訟　第３１回口頭弁論
日時：１２月１３日（火）１５：３０ 開廷
場所：松山地裁３１号法廷（原告１４：００ 支援者１４：３０ 裁判所ロビー集合）
報告集会：１６：１５頃～　愛媛県美術館講堂
問い合わせ：伊方原発をとめる会（TEL089-948-9990）

武井たか子の県議会報告会
日時：１２月２４日（土）１３：３０～１５：３０
会場：コムズ視聴覚室ＡＢ
ゲストスピーカー：青野篤子さん（福山大学名誉教授）「ジェンダーあるある」

武井事務所は月曜から金曜の10時～16時に開けています。ご相談の方は事前にご連絡ください。

生き活き政治ネット通信

生き活き政治ネット
松山市衣山2-4-47、2F
TEL/FAX 089-924-2485
ikiiki@cnc.e-catv.ne.jp

２０２２年11月11日発行

「武井たか子の県議会報告会」のご案内

９月議会最終日討論（10／５）

暑い暑い夏でした。やっと秋を楽しみつつ、冬を待つ気分になりました。みなさま、お元気でいらっしゃいますか。いつも「武井たか子の県議会報告」を送らせていただき、ありがとうございます。

私は、「ネットワーク市民の窓」という一人会派で、県民のみなさまのご意見やご相談を伺いながら、県政の課題に一つ一つに向き合い､活動させていただいております。

2023年は2期目の節目の年となります。いま3期目を目指して、準備を始めました。ぜひ、引き続きのご支援を心よりお願いいたします。

今年も「県議会報告会」を開催します。2期5年間を振り返り、ご報告するとともに、急速に少子高齢・人口減少が進む愛媛県で、一人ひとりが自分らしく幸せに生きるために、何が問題かをみなさまと考える会にできたらと思っています。年末のあわただしいときですが、ぜひ、足を運んでいただけますように、よろしくお願いします。

日時　１２月２４日（土）１３:３０～１５:３０
会場　コムズ（松山市男女共同参画推進センター）視聴覚室ＡＢ
［ゲストスピーカー］ 青野　篤子 さん（福山大学名誉教授）
「ジェンダーあるある」

学習会「山鳥坂ダムの地質学的問題」のご案内

昨年12月、国土交通省山鳥坂ダム工事事務所は、山鳥坂ダム建設工事の大幅な見直しを公表。約400m上流に予定地を変更、総貯水容量は290万トン減り、総事業費は当初の1.5倍以上となる約1,320億円に増額、完成は2026年から2032年度と6年も延びました。ダムに頼らない「流域治水」へと政策転換を図るべきです。山鳥坂ダムは本当に必要なのでしょうか。元愛媛大学学長の小松正幸さん（地質学）をお招きして、地質学的な観点から山鳥坂ダムの問題性を学びます。ぜひご参加ください。

日時　１１月２３日（水、祝日）１３：３０～１６：００
会場　松山市民会館 第４会議室（松山市堀之内）
講師　小松 正幸 さん （愛媛大学元学長、地質学）

学習会「コロナ禍で見えた 日本の医療行政の問題点」

本田 宏さん

11月3日、本田宏さん（NPO法人医療制度研究会副理事長）を講師にお迎えして、日本の医療行政の問題点について、お話をうかがいました。（本田さんは ZOOMでの出演）

コロナ禍で、なぜ日本の医療がこれほど逼迫するのか、本田のさんの答えは明確で、医師不足に尽きるとのこと。

日本の医師数はＯＥＣＤ（経済協力開発機構）平均と比較して１３万人不足している、絶対数が不足している。感染症、集中治療の専門医も足りない。さらに日本の公的病院は２割、８割が民間病院である。PCR検査数が少ないのも、医師数が少なく、さらに保健所も感染症病床も削減してきたから、政府による医療費抑制政策の問題点を指摘された。

海外では、医療、福祉、教育は公的なものと考えられているが、日本ではこれらの予算を削ってきた歴史がある。先進国としては特殊な現実を詳細なデータを駆使して示された。そして、こうした実態を隠し、国民を騙してきたメディアの責任も大きいと述べられた。

本田さんは講演中に駄洒落を連発、会場は何度も爆笑に包まれたが、これには理由があって、いくら「正論」でも伝え方、見せ方を工夫しないと相手の心に届かない、人に伝えていくことの重要性を認識されてのことだそうだ。「ユーモアは人類の最高の宝物、最強の武器である」の実践であり、「絶対に諦めない」とお話を終えられた。啓発されることの多い実りある学習会だった。

「四国朝鮮学校交流フェスタ」に参加して

10月16日、四国朝鮮初中級学校で第8回四国朝鮮学校交流フェスタが行われた。当日は、心配していた天候も絶好で、10時から第1部の「公開授業」から始まった。次いで11時からは屋外での第2部「交流フェスタ」に移行し、開会のあいさつの後、福岡広島朝鮮歌舞団による華やかなオープニングから始まった。続いて生徒たちの出番で全生徒による合唱や舞踊や空手の演技など、日頃の練習の成果が披露され、参加者の声援を受けていた。

12時頃からは休憩（昼食）時間で、焼き肉をはじめ、クッパ・チジミ・キムチなどのコリアンフードや飲みものなど、市民側の手作りの3種類の弁当、挽きたてのコーヒー、愛大学生によるホットケーキやファーストフードなど、市民基金のバザーもあり、屋台や出店に人だかりも出来て賑わった。

休憩後は、まず市民側の出し物の出番で、今治の市民による沖縄の歌と三線の披露、国鉄四国トレインズの合唱、「ゲームで遊ぼう」、続いて歌舞団の華やかな公演で盛り上がり、最後には参加者全員が大きな輪となり和やかで盛り上がったフィナーレとなりフェスタが終了した。

フェスタには香川・高知、徳島からの参加者もあり、大洲南中の生徒たちもマイクロバスで駆けつけてくれていた。日米欧が危機を煽るなか、「ふれあい、理解しあう」というフェスタの目的は十分に果たせたと思う。

終了後は、生徒たちをはじめ多くの方たちの協力で後片付けを行なった。多数の参加者の協力もあって、準備の時間よりはるかに短時間で片付いた。生徒たちの全力投入の姿は、いつもながら感動的だった。

山中 哲夫（四国朝鮮学校の子どもたちの教育への権利実現・市民基金）

リーディング劇「明日のハナコ」を観て

二人の女子高生の「こんな劇をやりたい」というおしゃべりを通して、彼女たちの日常の悩みや疑問を絡めつつ、祖母ハナコを主人公とした「やりたい劇」のストーリーが語られる（原発や人権問題に正面から切り込んだストーリー。「明日のハナコ」で検索してネットで読めます）、という二重構造の物語。

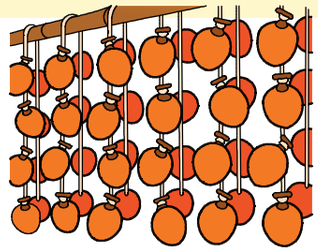
この舞台にはさらにもう一つの物語がありました。福井県高校演劇祭に参加し上演されながら、この作品だけが福井ケーブルテレビで放映されなかった、という事実を発端とした物語です。この日の上演も、この三番目の物語を見過ごすことのできなかった人たちによる三番目の物語の一部というべきものでした。

高校生たちの表現活動に対する学校関係者らの監視や圧力、実はこれは、愛媛で生まれ育った私にはなじみ深いものでした。私の高校生時代は、公立高校の演劇部の校外活動そのものが認められていなかったのですから。現在はどうなのでしょう？　愛媛の高校で、この劇を上演できる高校はあるのでしょうか？　役者・スタッフの熱意の溢れる舞台に、現実を見ましょう、知りましょう、そして子どもたちを守りましょうと呼び掛けられたようでした。

大早 直美（生き活き政治ネット世話人）

※ リーディング劇「明日のハナコ」は「たぶち紀子と未来につなぐ会」総会の基調“公演”として10月22日、愛媛県教育会館で上演。出演は、青野悦子さん（左）、佐川由香さん。

映画「朝までバス停で」を見終えて



2020年11月、幡ヶ谷（東京都渋谷区）のバス停で、大林さんというホームレスの女性が殺された事件をモチーフに、高橋伴明はコロナ禍における貧困や社会的孤立を描く作品を作った。

板谷由夏が、生真面目で融通が利かず、人に頼ることを良しとしない三知子（主役）を演じる。三知子は緊急事態宣言で職と住まいを失う。昼は公園で時間を潰し、夜は最終バスのはけたバス停の椅子に眠る生活。街頭テレビからは菅義偉首相（当時）の「自助、共助、公助、そして絆」という演説が空しく流れる。

友人や元上司の連絡にも応じず、所持金も数千円となった時、三知子は残飯へと手を伸ばし、怒鳴られ逃げ惑う。途方に暮れた時、手を伸ばしてくれたのはホームレス仲間の「ばくだん」（柄本明）と呼ばれる男だった。男との出会いをきっかけに、三知子に「爆破」という企てが芽生えるが、ばくだんの叡慮により企ては未遂に終わる。

ある晩、ナイロン袋に石を入れた男が、バス停で眠る三知子に近づいてくる……すわと思った瞬間、元上司が位置情報アプリで三知子を尋ね当て、惨禍はすんでの所で食い止められた。映画は、爆発によって燃えさかる国会議事堂の映像で幕を下ろす。

人と人との確かな繋がりがあれば大林さんの命も救えたのかもしれない。しかし、出会いをすり抜けてしまう人たちへ、どんなセーフティーネットが必要なのか。加害者の男も決して幸せとは言えない日々を送っており、被害も加害も生まない社会を作って行くには、国会議事堂を爆破するだけでは事足りそうにない。怒りをどう昇華すればまっとうな暮らしや政治を取り戻せるのか。また一つ宿題の増えた夜道をたどりながら夜空を見上げた。

バス停で潰えし命　鵙（もず）猛る

渡邊 桂子（生き活き政治ネット世話人）